

堀先生に聞いてみよう

その9

【質問】「先生のお知り合いやご親戚は、今回の東日本大震災で、被害はありませんでしたか？ 先生は、この大きな災害を通してどんなことをお考えになったでしょう。また神さまからどんな語りかけをお受けになりましたか？ 礼拝説教の中では、この震災についてどのように触られましたか？」

【回答】

東日本を襲った大地震と東北を直撃した大津波、そして今なお収束しない原発事故は、いずれも想定外のものばかり。被災地の方々のことを考えますと心が本当に痛みます。その日、私は都内の大学に出講しており、授業の真っ最中で大地震に遭遇しました。電車は止まり電話も不通となった中、12時間をかけて埼玉の自宅まで帰りました。気が付いたら朝4時になっていました。

あの日以来、その衝撃といまだ復興への道筋が描けていない状況の中で、私はマスコミを通して入ってくる被災状況をしながら、色々なことを考えさせられて来ました。幸い福島、茨城の

被災教会と被災地域を訪問する機会があり、多くのことを皮膚感覚で学ぶことも出来ました。

●メメント・モリを意識して

この大震災を巡って、マスコミの報道や論評が過熱していく中で、それも頭に置きながらではあるのですが、私の心に生じた思いは、あのメメント・モリ（ラテン語で『死を覚えよ』）ということばでした。これは中世の修道士たちの朝の挨拶だったそうですが、いつ訪れるか分からない死の事実を再確認し、その日その日を大切に生きなくてはならないというメッセージの込められた、いわば死生観の質を問われるようなことばです。

考えてみれば、これは余りにも自明な真理であり、そう心得るべきなのですが、普段はそうはいきません。しかし交通事故や突然死などの不慮不測の死、また戦争や自然災害などによるマス（多数）の死に直面しますと、それがよく分かるのです。今回の震災は、このメメント・モリを普段の何倍ものレベルで意識させてくれたのです。人はいつ死を迎えるか分からない。大地が大きく揺れ、それが長く続いた時、瞬間ではありましたが、もしかしたら

これが最後かも知れないとも思ったのです。

震災後、メメント・モリに加えて、それまで折に触れ説教などで引用してきたトマス・アケンピスのことばが普段よりも強く意識に浮かぶようになったのも事実です。次のような祈りです。

「一日が何をもたらすか、いったい、誰にわかりましょう？」

ですから神様、一日一日をこの世における最後の日であるかのように生きる事ができますよう、どの日も、この世の最後の日とならないともかぎらないのだということ、私は知っています。」

一日を最後の日のようにして生きるということの大切さは、忙しく活動的な世界ではなかなか意識しにくいものですが、多くの人たちの瞬時の痛ましい死を通して、生と死について、改めてしかもリアルな感覚で考えさせられたのです。そして、このことは当然、礼拝説教の中に反映されることになりました。

●だれもストレス障害に

メメント・モリに連鎖して、もう一つ、それもば反射的に考えたことは、臨床

牧会カウンセラーという私の仕事からくるものです。それはあのような被災状況を見たり、マスコミの情報にさらされると、人の心は傷つき、それこそ被災するということです。専門的にはストレス障害と言いますが、その中でもさらに「災害ストレス」の問題が私の心に大きく浮かびあがったのです。ここでは詳細に述べることが出来ませんが、この時期、いくらかでも読者の皆さんの助けにでもなればと思ひ、簡単に記すことにしました。

ストレス障害とは、今回の大地震のように生命に危険が及ぶほどの体験をしたり、そうした場面を見ることにより心に深い傷（心的外傷）を受けた人が、精神的に強い恐怖感や無力感を感じている状態を差しています。その状態を「ストレス反応」といいますが、次のようなものです。

(1) 地震のことが何度も頭に浮かび、気分が悪くなる（ニュースの映像、揺れの場面、緊張など）

(2) 地震のことを考えたり話したりしたくない（地震関連のニュース、話題など）

(以下略)